

陳舜臣さんを語る会通信

NO.38

May. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年5月20日

三十年来の宿題『天球は翔ける』

本号では、『天球は翔ける』を取り上げました。

陳舜臣さんの小説で、アメリカを舞台にしたものは他にあるのでしょうか。『青山一髪』（『孫文』）では、孫文の、ハワイを含め、アメリカでの活動に相当な頁が割かれます。同作品では、1896年、ニコライ2世の戴冠式帰りの李鴻章さえ登場させています。しかしそれは、『青山一髪』全体から見ると一

部に過ぎません。

『天球は翔ける』の初出は、1999年1月1日～12月14日、毎日新聞朝刊です。ここに使用した単行本は、毎日新聞社、2000年発行です。

同著表紙→

（編集委員 橋雄三）



「三十年来の宿題」

上掲著「あとがき」より

文中、傍線は編集委員加筆

三十年前、私がサンフランシスコをはじめて訪ねたのは、大陸横断鉄道開通百周年記念の翌年であった。その工事に多くの中国人労働者が参加し、犠牲者もすくなくなかった。そして、当時にあつては当然と思われたが、開通祝賀会には中国人は一人も招かれなかった。百年たつてそのことを反省したのか、大統領から華人の協会にそのことを詫げる書簡が届いていたのを知った。

中国系の人に、そのときいろいろな話をきいたが、鉄道工事に来た人のなかには、太平天国の残党もかなりいたということである。私はいつかこの時代のアメリカを舞台に小説を書こうと思った。毎日新聞から連載小説の話があつたとき、私はためらわずに、この三十年来の宿題をはたそうと思った。それがこの小説である。かつて詩意がうごき、作つた一首の七言律詩が、私の一九七〇年の詩稿に残っている。（下の枠内）

二〇〇〇年三月 陳 舜臣

サンフランシスコ チャイナ・タウン
旧金山 唐人街にて感有り

出身は南粵の虎門湾
民変、王難、稼穡の艱
浪は撃つ零丁残喘の客
風は吹く蓬転遠洋の関
時に鉄路の西東に關くに逢い
日落、鷄鳴、冬夏も班す
幾許か蔓の纏わる荒野の骨
嗚呼、今日の旧金山

出身はたいてい広東南部
林則徐がアヘンを消滅させた虎門のほとり。
民衆蜂起があり、清朝の迫害ははげしく
百姓などしておれなくなり
うらぶれはてて海外に出稼ぎに行くしかなかった。
辛うじて呼吸をしているそんな渡航者に
太平洋の浪は無情にも撃ちつけるようだった。
風が蓬を吹きころぼせるように
遠い西洋の海岸に彼らははこばれた。
ちようど大陸横断鉄道建設のころ
彼らは朝から晩まで
寒い冬も暑い夏も働きづくめだった。
多くの仲間がアメリカの荒野に骸をさらし
彼らの骨に蔓がまとわりついた。
どれほどの人が斃れたのだらうか
こんにちの殷盛さをみるにつけ
忘れられないことがすくなくない。
ああ、繁栄のまつただ中のサンフランシスコよ！

（読みと通釈のみ残し漢詩は省略しました）

トーマス・ヒル画「最後の犬釘」→
プロモントリー・サミットにおける大陸横断鉄道の開通式
（一八六九年五月一〇日）の様子を描いた油彩画
中国人は招かれなかった
homipage.cocolog-nifty.com より



『天球は翔ける』時代背景並びに登場人物 ほか

時代背景			
西暦	中国	アメリカ	日本
1840	アヘン戦争(～42)		
1842	南京条約		
1845		テキサス併合	
1846		アメリカ・メキシコ戦争(～48)	
1848		カリフォルニア領有	
		金鉱発見	
1851	太平天国(～64)		
1852	バウン号の苦力反乱		
1853			ペリー来航
1854			日米和親条約
1856	アロー戦争(～60)		
1858			日米修好通商条約
1859			横浜開港
1860	北京条約	遣米使節の随行艦として、咸臨丸渡米	
1861		南北戦争(～65)	
1863		奴隷解放宣言	
1865		憲法修正で黒人奴隷解放	
1866		梅天球らサンフランシスコ着	
1868		最初の日本人移民ハワイ着	1月、神戸(兵庫)開港
			10月、明治改元
1869		大陸横断鉄道開通	
1870	天津教案		
1871			宮古島島民遭難事件
1874			台湾出兵
1877		事業進出で、天球らニューヨークへ	
1879	第一次イリ条約		
1881	(改定)イリ条約		
1882		中国人労働者入国禁止法	

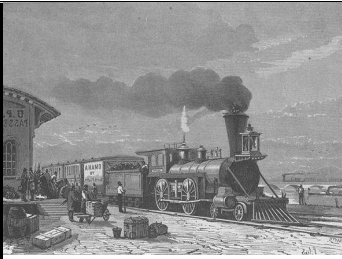
主な登場人物	
ばいてんきゅう 梅天球	主人公。琉球出身で両親を知らない。中国福州の「琉球館」で進貢貿易に従事している時、琵琶山を拠点とする海賊に捕られる。香港を経てアメリカへ
あきょう 阿杏	琵琶山を根城とする海賊の女親分。島の掟でつかの間の夫婦となった日本人・林和十と秘密裏に連絡を取りあっている。アメリカに向った琵琶山一行のリーダー
さんじん 山人	もとキリスト教徒で、太平天国に賛同し、信者の多い琵琶山に住み着く、別格。アメリカに向かった一行の世話役・参謀。阿杏が頼りとする
おうとう 王韜	実在の人物。名文家。1879年、日本訪問。その旅行記『扶桑遊記』は有名
ほとんじ 雨添治	琉球館の天球の助手。一緒に海賊に捕まる
はねじょうどう 羽地宗道	師・牧志朝忠の自殺に絶望し、琵琶山一行に同道、アメリカへ渡る
りんこんよう 林坤用	(ヘンリー)。苦力輸送船バウン号での反乱の生き残り。イギリス人宣教師レグのもとで働き英語が堪能
こうたいらい 康大雷	太平天国の首領洪秀全の幼なじみ。渡米経験がある。猪仔房から山人に買い取られる
あふく 阿福	(ラッキー)。客家の女性。スリの名人。琵琶山の一行に加わり、阿杏に信頼されるようになる。天球との仲がだんだん接近
とあみん 杜阿明	(ジョージ)。林坤用とともにレグのもとで働いていた。洋人と広東人(母)の混血児
あさい 阿オ	アメリカで働いてためた金を盗まれ、困っているところを山人に拾われ再びアメリカに向かう。あとあと、ストーリーに絡む謎の多い人物
おうどう 王道	サンフランシスコで働く御者。拳法の達人。父が呉家で働いていた。天球の仲間
ごとう 呉棟	増城の豪族呉一族の後継者。李鴻章の幕閣をつとめたエリート。一族あげて米国移住を企てる。事業の才もあり、琵琶山一行と強く繋がる
あこう 阿甲	阿杏と林和十の子



homepage.cocolog-nifty.com より

大陸横断鉄道は、東側からネブラスカ州オマハを起点にユニオン・パシフィック鉄道が、西側からカリフォルニア州サクラメントを起点にセントラル・パシフィック鉄道が、それぞれ建設を進めていった。用地は線路だけでなく、付属地が無償供与され、建設費用も、国債の発行により調達された補助金が支給された。それで両社は、できるだけ自社の運行区間を長くしようと大いに競い合った。開通式は1869年5月10日、両鉄道の接続点となったユタ州のプロモントリー・サミットで挙行された。

『天球は翔ける』 各章あらすじ

巻	章	内 容	
上	夢破れて	梅天球、琵琶山の海賊に拉致される。琵琶山では、多くの若者が太平天国に加わった。海賊の女親分阿杏は、太平天国に加わって夢破れ、救いを待っている若者を香港に集め、新天地へ送ることを考えていた	
	天国のあと	太平天国が詳述される。あとあと、太平天国は繰り返し記述される	 天王洪秀全
	香港の王さん	王韜を狂言回しに、陳さん、香港について蘊蓄を語る	
	ちょしぼう猪仔房の人	初期香港の重要産業、猪仔貿易の商品は苦力(クーリー)。輸出されるまでの苦力の住むところが猪仔房(ブタ小屋)	
	旅立ちの前	渡米前の一行。実在の牧志朝忠のこと、バウン号の苦力反乱なども詳述	
	インダス号	クーパー 船長のもと、一行は、香港、台湾、琉球を経て日本へ	
	維新の海	インダス号、横浜港入港。咸臨丸の渡米ほか、幕末の渡米、渡欧の記述	新聞連載の挿画
	ハワイ寄航	カメハメハ王朝の時代。サトウキビ栽培に中国人労働者が入り始めている	
	回想の島	梅天球と林坤用はハワイに残る。二人で回想。坤用のこれまでの人生も	
	旧金山上陸	1866年、一行に少し遅れ、天球、坤用もサンフランシスコ着。当時のサンフランシスコは、大陸横断鉄道建設労働者供給の西の拠点となっていた。阿才、一行の所持金、多額の銀貨を持って消える	
下	門前の椅子	中美旅社の門前、康大雷が梅天球に話す。洪秀全とのこと、ボルネオの蘭芳公司の話など	
	東方商店	天球、ラッキーら王道の幌馬車でサクラメントへ。東方商店はサクラメントで唐人が開いている商店。天球、初めてラッキーと親しく話す。阿才の話も出る	
	ラッキーの話	ラッキーの身の上。阿杏のこと、その夫のことなど	
	チャイニーズ・キャンプ	サンフランシスコへ来て一年が経った。天球は王道の馬車でネバダの鉄道建設労働者のチャイニーズ・キャンプへ。目的は阿才捜し。琵琶山から鉄道建設現場へやって来たのは苦力ではなく、自由契約労働者	 天球は翔ける 下 陳舜臣
	ネバダより帰る	天球は、ネバダから帰りの馬車で王道とおしゃべり。王道の身の上話や唐人による、サンパブロ湾での漁業のことなど	
	天球旅社	阿杏は、中美旅社の近くに、新しいホテルを開業。ゆくゆくは、経営を天球に任せようと天球旅社と名づける。清国、外国に駐在する外交官の派遣はじまる。■太平天国の残党 捻党(捻軍) 浙江九姓漁戸 蛋民	
	サンパブロ湾	サンパブロ湾にも漁業者のチャイナ・キャンプ。又々、太平天国の詳しい話。阿才の銀貨持ち逃げには裏がありそう。天球とラッキーの仲、公認	
	結 束	阿才探索は結束(幕引き)に? 琵琶山の歴史。阿才、盗みの真実	
	風の丘	天球とラッキーの仲、公然。サンフランシスコの丘で二人の時間。阿才の正体	『天球は翔ける(下)』表紙
	唐山往還	阿杏、香港へ帰る。目的は? 呉棟の経歴	
	客到る	増城呉家の後継者呉棟がサンフランシスコに。琵琶山の一行と業務提携を持ちかける。特に天球に	
	逆風の時代	1869年、大陸横断鉄道が完成。東から、大勢の労働者が仕事を求め西へやって来る。就職難の時代に。中国人排斥熱。琵琶山と増城呉家との因縁	
	帰る人	羽地宗道と甬添治、ウチナへ帰る。■牧志朝忠 宮古島島民遭難事件	 天球はこんな汽車を利用
	ニューヨークへ	琵琶山と呉家の提携事業は繁栄。1882年、中国人労働者入国禁止法	
	るつば 垵塢	1860年頃、ニューヨーク、百万都市に。1877年、天球ニューヨークへ。呉家のニューヨーク事務所建築計画	
	桃花扇	阿才戻る。阿才の南曲、「桃花扇」を聞く。天津教案、イリ条約を含め、清朝末期の国際関係を詳述。海防派、塞防派。■曾国藩、紀澤親子 李鴻章 左宗棠 沈葆楨 崇厚 林則徐	
	環球花	いま、自分たちがやっているのは50年後の芝居作りで、主役は天球、題は「環球花」としようと呉棟はいう。そして自分が使っている金の出所を明かす	
	海外の一浮鷗	天球とラッキーはクーパーの船で香港へ。香港で阿甲に会う。阿甲は天球に阿杏の夫の連絡場所を告げる。天球の新しい仕事の舞台は上海!	

『天球は翔ける』掲載紙、毎日新聞の記事より

1999年の元日から連載が始まる98年の年末、12月28日夕刊に載った陳舜臣さんの記事です。連載を間近に控えて、作家としての陳さんの思案・作戦が仄見え、興味深いです。文中、傍線は編集委員の加筆。

「天球は翔ける」陳舜臣さんに聞く

陳舜臣さんの連載小説「天球は翔ける」が、元日から連載が始まる。主人公は南北戦争直後の琉球の青年。激動の時代をグローバル、かつざん新な視点で描く。米大陸横断鉄道の建設を支えた苦力に光を当てることは30年来の宿題でした、という陳さんに、物語の世界を語ってもらった。

元日から連載
「天球は翔ける」は、陳舜臣さんの代表作。主人公は南北戦争直後の琉球の青年。激動の時代をグローバル、かつざん新な視点で描く。米大陸横断鉄道の建設を支えた苦力に光を当てることは30年来の宿題でした、という陳さんに、物語の世界を語ってもらった。

中国人苦力と琉球青年の活躍
19世紀の米国舞台に描きたい

陳舜臣さん
陳舜臣さん（左）と陳舜臣さん（右）
陳舜臣さん（左）と陳舜臣さん（右）

陳舜臣さんの連載小説「天球は翔ける」が1月1日から始まる。主人公は南北戦争直後の米国で中国人労働者、苦力らと共に活躍する琉球の青年。激動の時代をグローバル、かつざん新な視点で描く。米大陸横断鉄道の建設を支えた苦力に光を当てることは30年来の宿題でした、という陳さんに、物語の世界を語ってもらった。

「今の時代はボーダーレスになったというでしょう。でも、いろいろな民族が一緒に仕事をし何かを作るといふ現象は、昔からのことです。もちろん国際分業などという考えはなく、奴隷制を通じてそうなっていたのです。今回の作品を通して、人間が仕事を分担しあってきた歴史も考えてみたいんです」

そうした人間の共同作業がもつともドラスティックに行われたのが米国だろう。イギリス、フランスの奴隷制廃止に続き、米国では一八六三年、リンカーンが奴隷解放を正式に

宣言した。代わる労働力として脚光を浴びたのが中国人の未熟労働者、苦力だった。

折しも中国では、アロー戦争後の北京条約（一八六〇年）でアヘン輸入と苦力輸出が公認された。マカオや香港からオーストラリアやハワイ、南北アメリカなど世界各地に向け大量の苦力が送り出され、今日の華僑の源となった。

「中南米、中でもペルーやキューバにたくさん行っているが、現在は痕跡が残っていないのです。サンフランシスコは、読み書きが出来たり自由契約など比較的条件の良い苦力が多く、成功すると家族ら呼び寄せ、大きな中国人社会を築きました。しかし、中南米の苦力は現地と同化してしまっ。コミュニティーを築くことも出来ないほど苦しい生活だったのでしょう。今でも、目の細い黒人は祖先が中国人、なんて言ってますが。このように消えてしまった苦力もあった」

陳さんが苦力に着目したのは30年も前のことだ。一八六九年に完成した最初の米大陸横断鉄道は、東半分がアイルランド人、西半分は苦力の労働力で出来た。

「鉄道完成から約百年後の70年頃、初めてアメリカへ取材に行きました。サンフランシスコの中国人協会で、こんなものが来ていると見せられたのが、大統領の感謝状。百年前の完成式典にあなた方を一人も招かなかったのは大変失礼でした、といった内容でした。

あのころは奴隷同然でしたから、もちろん

中国人はだれも招待されなかった。ああ、これは面白いなあ、と思ったのです」

以来、折にふれて取材を続けてきた。

この苦力の歴史に、鮮やかな光を投げかけるのが琉球というモチーフ。

当時の琉球は薩摩藩と清朝中国に両属。進貢貿易を手掛け、鎖国日本の海外への窓口になっていた。主人公天球も、英語が出来る外国通だ。

「明治維新の時に薩摩が世界の事情に詳しくったのは、琉球のお陰ですよ」

その維新が、物語の背景に間近に迫る。南北戦争終結を目前にした米、列強の影が入り乱れる中国。波乱の世界へと飛びだしていく天球は、生まれてきた意味を思い悩む普通の青年でもある。一体、彼はどこへ向かうのか。

「さあ、台湾もあるし、ハワイもあるし。最後はどこまで行きましょうか」

長年住み慣れた神戸・六甲の家を離れ、同市内のマンションに越したばかり。眺めを一新した書齋で、思いを巡らせる日々が続くそう。

